

『土佐日記』の意匠

—和歌に関する記述の分析を通して—

平沢 竜介

かつて萩谷朴は『土佐日記』は歌論書か」と題する論文⁽¹⁾において『土佐日記』は、「興味本位の啓蒙的な意味においてはより有効なそしてその思想内容よりすれば同時代の常識的な歌論書よりも却って豊富周到な内容をもつ歌論書として、貫之自身、又当時の歌をよむ人々によつて期待され歓迎された作歌指導書であつたと考へられるのである」として『土佐日記』の主題にその歌論書性格を指摘され、さらにそれ以降のいくつかの論考⁽²⁾においてその主題論を深化させ、最終的には『土佐日記』は「五十五日間の旅行の事実を素材とし、克明に日次を逐うた日記の形を執つてはいるものの、その間に脚色・虚構を多用した、寧ろ創作に近い作品であつて、表層第一主題Ⅱ歌論展開、表層第二主題Ⅱ社会諷刺、表層第三主題Ⅱ自己反照という三大主題を並行させた、極めて多目的で、複雑多岐な内容を包含した作品である」とした⁽³⁾。

しかし、文学作品における主題を「作家がその作品において最も表現したいと意図するもの」と定義するなら、『土佐日記』の主題は自己反照、特に亡児哀傷の部分に存するよう思われる。既に拙論でも述べたとおり⁽⁴⁾、

貫之は自ら切実に表現したいテーマがあつたにもかかわらず、それを直接表現することは、当時の文芸観からすると律令官人としてあるまじき行爲であつたがために、貫之は『土佐日記』に様々な偽装を施し、この日記がいい加減に書かれたように見せかけて、世間の非難をかわしながら、そこに彼の真に表現したいもの組み込んだと推察される。『土佐日記』を読んだとき、一見主題が混乱しているように感じられるのも、実は貫之が意図的に行つた操作で、貫之は自ら真に表現したいもの他に、和歌に関する記述等の様々な要素を取り込むことによつて、『土佐日記』に様々なテーマが述べられているように見せかけて主題を分裂させ、作品にいい加減なものの印象を与え、世間の非難をかわしながら、彼の表現したいものを表現したと考へられる。とすると、『土佐日記』における和歌に関する様々な記述は、『土佐日記』に歌論的主張を織り込むことによつて、主題を曖昧にして、『土佐日記』がいい加減に書かれたものとの印象を植え付けるために取り入れられた題材の一つということになり、先に述べた文学作品の主題の定義に従うならば、『土佐日記』の主題ではないということになる。

が、真に表現したい内容を韜晦するために設けられた記述であるにしても、そのことは『土佐日記』に記されている和歌に関する記述の内容がいい加減なものであることを意味するとはかぎらない。貫之は『土佐日記』において、主題を混乱させ、真に表現したいものを韜晦するために和歌に関する記述を取り入れたわけであるが、そのように主題を曖昧にするためになされた記述であつても、その詳細を検討してみると、そこには論の一

貫性が認められ、日記執筆当時の貫之が心の中に抱いていた和歌に対する真摯な省察や彼がそうした記述に託して密かに表現したかったものを見て取ることができるようと思われる。

そこで、本稿では、『土佐日記』に見られる和歌に関する記述の分析を通して、それらの記述によって貫之が表現したかったものは何かという点について考察してみたいと思う。

二

『土佐日記』の和歌に関する記述の中でまず目を引くのは漢詩に関する記述が出てきた後、必ず和歌に関する記述が出てくることである。該当する箇所を引いてみよう。

資料①

(1) 漢詩、声あげていひけり。和歌、主も客人も、こと人もいひあへり。

漢詩はこれにえ書かず。和歌、主の守のよめりける、

みやこ出でて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬる

かな

となむありければ、帰る前の守のよめりける、

しるたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなく

に

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。(十二月二十六日)

(2) この折に、ある人々、折節につけて、漢詩ども、時に似つかはしきいふ。また、ある人、西国なれど甲斐歌などいふ。「かくうたふに、船屋形の塵も散り、空行く雲も漂ひぬ」とぞいふなる。

(十二月二十七日)

(3) むべも、昔の男は、「棹は穿つ波の上のつきを、舟は庄ふ海の中の空を」とはいひけむ。聞き戯れに聞けるなり。また、ある人のよめる歌、

水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし

これを聞きて、ある人のまたよめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき

(一月十七日)

(4) 男どちは、心やりにやあらむ、漢詩などいふべし。船も出ださで、いたづらなれば、ある人のよめる、

磯ふりの寄する磯には年月をいつともわかぬ雪のみぞ降る

この歌は、常にせぬ人の言なり。また、人のよめる、

風による波の磯には鶯も春もえ知らぬ花のみぞ咲く

この歌どもを、すこしよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日に

ろの苦しき心やりによめる、

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつつ人をはかるべらなる

(一月十八日)

(5) 二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出でくる。

かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、帰り来ける時に、船に乗るべきところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしの、漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん給ひ、今は上、中、下の人も、かうやうに、別れを惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞよめりける。かの国人、聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、このことば伝えたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことばやあらむ。(一月二十日)
(6) 男たちの心なぐさめに、漢詩に「日を望めば都遠し」などいふなる言のさまを聞きて、ある女のよめる歌、

日をだにも天雲近く見るものをみやこへと思ふ道のはるけさ

また、ある人のよめる、

吹く風の絶えぬ限りし立ち来れば波路はいとはるけかりけり

(二月二十七日)

以上が『土佐日記』で漢詩への言及がなされた場面の全てである。この(1)から(6)の用例から分かるように、『土佐日記』では漢詩についての言及がなされると、必ず和歌が詠まれるという現象が見て取れる。(2)の甲斐歌は和歌と認めてよいかどうか異見のあるところであるが、甲斐歌は『古今集』巻二十東歌に、陸奥歌七首、相模歌一首、常陸歌二首、甲斐歌二首、伊勢歌一首、それに藤原敏行の「冬の賀茂の祭の歌」という順で収められている。巻二十に収められている歌は、当時何らかの旋律を伴って謡われていた歌謡と推定されるが、いずれも五・七・五・七・七の短歌形式を有しており、『古今和歌集』というように和歌の集に収められていることからすると、いずれも貫之の時代には和歌と認められていたようである。ところで、このように漢詩の語あるいは漢詩の引用が文章中に現れる時必ず和歌がそれに続いて記されるという事実は、『土佐日記』の作者貫之が漢詩と和歌が対等の地位にあることを示すことを意図して行った意識的な表現であると思われる。特に、(3)、(6)の用例は漢詩あるいは漢文の内容を和歌で翻案した形となっており、漢詩と和歌の同等性をより強く示すものといえよう。

しかし、そのみではない。『土佐日記』の漢詩に関する記述の中でも(5)の阿倍仲麻呂の帰国に際しての記述は、さらに注目すべき主張を含んでいる。(5)の記述においては、仲麻呂が唐からの帰国に際して和歌を詠んだとき、仲麻呂が「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん給ひ、今は上、中、下の人も、かうやうに、別れを惜しみ、喜びもあり、悲しびも

ある時にはよむ」と語つたと記している。仲麻呂が実際このように語つたかどうか定かではない。むしろ、帰国に際しての互いになごりを惜しむ場面において、このような説明口調の発言はその場にそぐわないものであつたと思われる。この発言は仲麻呂のものとするより、『土佐日記』の作者、貫之のものと見なす方が穏当であろう。ここで貫之は仲麻呂の口を借りて、単に和歌は漢詩と対等ものであるのみでなく、日本独自の文学形態であり、神代の昔から今にいたるまで、身分の上下にかかわらず、あらゆる人々が、喜びや悲しみの中で生じた時に詠むものだという主張を語っているのである。

しかもこの仲麻呂の口をかりてなされた主張はこの一月二十日の場面にとどまるものではない。それらの主張は『土佐日記』の他の部分からも窺い知ることができる。例えば、「上、中、下の人」が歌を詠むという主張は、『土佐日記』においては、貫之の他、亡児の母、淡路の専女という老女、ある人、ある女、童、女の童といった人々が歌の詠み手となるというように、老若男女、身分の上下にかかわらず多くの人々が歌を詠むという形で具現化されている。『土佐日記』の場合、一番高い身分といつても貫之程度となつてしまうのであるが、しかしそうした場合でも身分の上下に関係なく歌は詠まれることが表現されている。仲麻呂の口から出た「上、中、下」は上流貴族から下級の人々まで、つまりあらゆる階層の人々の意味と思われ、貫之の真意もそこにあつたと思われるが、『土佐日記』という貫之を筆頭とする旅の記録という文学形態においては、貫之は貫之一行のあらゆる

人々が歌を詠むという形でしか「上、中、下の人」が歌を詠むという主張を示しえなかつたのであろう。しかし、『土佐日記』における様々な人々の詠歌行為が、仲麻呂の主張と呼応することによって、この「上、中、下」が「あらゆる階層の人々」を意味しうることを貫之は十分承知していたであらう。

また、『土佐日記』には和歌が詠まれた前後に次のような記述がしばしば見受けられる。

資料②

- (1) 女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。ある人々もえ堪へず。このあひだに、ある人の書きて出だせる歌、 (十二月二十七日)
- (2) かく別れがたくいひて、かの人々の、くち網も諸持ちにて、この海辺にてになひ出だせる歌、 (十二月二十七日)
- (3) 岸にもいふことあるべし。船にも思ふことあれど、かひなし。かかれど、この歌をひとりごとにして、やみぬ。 (一月九日)
- (4) おもしろしと見るに堪へずして、船人のよめる歌、 (一月九日)
- (5) 船も出ださで、いたづらなれば、ある人のよめる、 (一月十八日)
- (6) この歌どもをすこしよろし、と聞きて、船の長しける翁、月日ごろの苦しき心やりによめる、 (一月十八日)
- (7) 童も媼も、いつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。この中に、淡路の専女といふ人のよめる歌、 (一月二十六日)

(8) 苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

(二月一日)

(9) 風の吹くことやまねば、岸の波立ち返る。これにつけてよめる歌、

(二月三日)

(10) ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、船なる人のよめる、

(二月四日)

(11) ある人の堪へずして、船の心やりによめる、

(二月四日)

(12) なほ、同じところに日を経ることを嘆きて、ある女のよめる歌、

(二月四日)

(13) これかれ、苦しければ、よめる歌、

(二月五日)

(14) 京の近づく喜びのあまりに、ある童のよめる歌、

(二月五日)

(15) ここに、昔へ人の母、一日片時も忘れねばよめる、

(二月五日)

(16) みやこ近くなりぬといふを喜びて、船底より頭をもたげて、かくぞ

いへる。

(二月六日)

(17) この歌は、みやこ近くなりぬる喜びに堪へずして、いへるなるべし。

(二月七日)

(18) 京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。

(二月十六日)

(19) なほ、苦しきに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

(二月十六日)

これらの表現を見ると、歌は、別れを惜しんだり、旅の苦しさを嘆いたりする気持ち、風景への感興、亡くなった女子を悲しみ、恋しく思う気持ち

ち、京に早く着きたいという願望、京に近づく喜び、などといった様々な感情が起こった時に詠まれている。かつ、それらの中には、「ある人々もえ堪へず」「おもしろしと見るに堪へずして」「苦しきに堪へずして」「喜びに堪へずして」「苦しき心やりに」「船の心やりに」というように「堪へず」とか「心やり」といった表現が多く看取されるが、そのことは和歌は心の中に強い感情が起こった時、そうした感情をこらえきれず、それを慰めたり、和らげたりするものとして詠まれるものということを示していると思われる。何気ない表現のようであるが、右に引いた例に見られるような表現は、貫之が意図的に用いたものと思われるのであり、そこには仲麻呂の逸話の中に出てくる、和歌とは「別れを惜しみ、喜びもあり、悲しびもある。時に「よむ」という主張の繰り返しを認めることができるように思われる。

しかも、仲麻呂の逸話では、仲麻呂の歌を人々が「思ひのほかになむ賞で」た点にふれて、「唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにはやあらむ」すなはち、中国と日本とは言葉は異なっているが、人の心は同じであるから詩の形は違っても共感させる力があるのであろうという。また、『土佐日記』には、この他にも

資料③

(1) 男も女も、いかでとく京へもがな、と思ふ心あれば、この歌よしと

にはあらねど、げに、と思ひて、人々忘れず。 (一月十一日)

(2) かかるあひだに、船君の病者、もとよりこちごちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざりけり。かかれども、淡路専女の歌にめで、みやこ誇りにもやあらむ、からくして、あやしき歌ひねり出だせり。 (二月七日)

(3) これを見て、昔の子の母、悲しきに堪へずして、

なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るが悲しきといひてぞ泣きける。父もこれを聞きて、いかがあらむ。かう様のことも、歌も好むとてあるにもあらざるべし。唐土もこれも、思ふことに堪へぬ時のわざとか (二月九日)

といった記述が存する。それらには、(1)のように歌が人々の心を代弁しているようだといつて共感したり、(2)のようによい歌に感動して歌を詠じたり、さらには(3)のように歌を聞いて心を動かされると同時に、歌を詠むことも漢詩を詠ずることも自らの感情をこらえきれなくなったとき詠まれるもので、その点では漢詩も和歌も異なるものでないとの主張までなされていたりするものもある。

このように、『土佐日記』の和歌に関する記述のうち、資料①、②、③に示した諸例を検討してみると、『土佐日記』においては、漢詩も和歌も異なった形態を取っているけれど、人間の感情がきわまった時詠出されるものであり、それによって人々は心を慰め他の人々にも共感を与えるという点に

おいては同質であり、和歌と漢詩は同等の価値を持つ優れた文芸であると主張がなされていると考えられるのである⁽⁶⁾。

三

もちろん、和歌が漢詩同様、人の心情を表出するものであるといつても、それはその心情が表現される形がどうでもよいというわけではない。まず、五・七・五・七・七という音数律を持つ短歌形式に則る必要がある。『土佐日記』の中には次のような記事が出てくる。

資料④

(1) その歌、よめる文字、三十文字あまり七文字。人みな、えあらで、笑ふやうなり。歌主、いと気色悪しくて、怨ず。まねべどもえまねばず。書けりとも、え読み据系がたかるべし。今日だにいひがたし。まして後にはいかならむ。 (二月十八日)

(2) 楫取、船子どもにいはく、「御船より、仰せ給ふなり。朝北の、出来ぬ先に、綱手はや引け」といふ。このことばの歌のやうなるは、楫取のおのづからのことばなり。楫取は、うつたへに、われ、歌のやうなる言、いふとにもあらず。聞く人の、「あやしく。歌めきてもいひつるかな」とて、書き出だせれば、げに、三十文字あまりなりけり。 (二月五日)

(1)は先の資料①の(4)で引用した場面に続く場面である。海が荒れて一日港に停泊することになった一行が不聊にまかせて、漢詩を詠じ、和歌を詠ずる。その和歌は波を一方は雪、一方は花に見立てた歌の唱和に、貫之と思われる人物が歌で判を下すといった、あたかも歌合のような形式をとった歌の連作である。(1)は、この連作に刺激されて、普段は歌を詠まない人が歌を詠んだところ、三十七文字という形になってしまったというのである。この三十七文字の歌めいたものに対し、周りの人々は笑いをこらえることができず、日記の書き手はこんなものは全く歌とはいえないという批評を付け加える。(2)はようやく天気恵まれ、都に向けて船を急がせる様が描かれた箇所、一行の長と思われる人物が「天氣が良いから船を早く漕げ」と命じたところ、楫取が舟子に「御船より云々」の言葉をかける。もちろん、「ものあはれを解さない楫取に歌が詠めるわけはなく、楫取自身も歌を詠むつもりは全くない。にもかかわらず、ここでは、その言葉は五・七・五・七・七の音数律を持っているが故に、歌のように聞こえると評される。この(1)、(2)を比べてみると、(1)は、意図的に歌を作ろうとしても、三十一文字にならず、歌とは似ても似つかない表現となった例、(2)は意図的に歌を作ろうとしたのではないにもかかわらず、歌のような表現となった例、ということができよう。これらの記述では、歌を作るには五・七・五・七・七という音数律が必要であり、逆にこの音数律に当てはまっていれば、歌を作ろうと意識しなくても、歌のようになってしまふこと、つまり和歌を作る際の絶対的な前提として、五・七・五・七・七

という音数律の必要性が指摘されていると考えられる。

また、音数律の他に歌には洗練された美しい言葉も要求される。

資料⑤

(1)七日になりぬ。同じ港にあり。今日は白馬を思へど、かひなし。ただ、波の白きのみぞ見ゆる。かかるあひだに、人の家の、池と名あるところより、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも海のも、こと物ども、長櫃になひつづけておこせたり。若菜ぞ今日をば知らせたる。

あさちふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけりいとをかしかし。この池といふは、ところの名なり。よき人の、男につきて下りて、住みけるなり。この長櫃の物は、みな人、童まできくれたれば、飽き満ちて、船子どもは、腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波立てつべし。かくて、このあひだに事多かり。

今日、破子持たせて来たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひひて、「波の立つなること」とうるへいひて、よめる歌、

行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむとぞよめる。いと大声なるべし。持て来たる物よりは、歌はいかがあらむ。この歌を、これかれあはれがれども、一人も返しせず。しつべき人もまじれど、これをのみいたがり、物をのみ食ひて、夜

更けぬ。この歌主、「まだまからず」といひて立ちぬ。(一月七日)

(2) 黒鳥といふ鳥、岩の上に集ま居り。その岩のもとに、波白くうち寄す。

楳取のいふやう、「黒鳥のもとに、白き波を寄す」とぞいふ。このこ

とば、何とにはなけれども、ものいふやうにぞ聞こえたる。人の程

にあはねば、とがむるなり。

(二月二十一日)

(2)は「黒鳥のもとに、白き波を寄す」という楳取の何気ない言葉が洗練された和歌的表現に近いものと見なされたというのであるが、このことはうら返して言えば和歌に用いられる表現は洗練された言葉使用が要求されることを暗に示していよう。(1)の一月七日の条は、池というところに

に住む女性と「歌よまむと思ふ心」ある男性とが対比的に描かれている。

池というところに住む女性は「よき人の、男につきて下りて、住みける」

人であり、京の雅を身につけた女性と推察される。それに対し「歌よまむ

と思ふ心」ある男は田舎育ちで風流をきちんと身につけておらず、生半可

な風流心をきどった男である。女性は若菜の日を忘れず、貫之一行がそれ

を懐かしんでいることを推察して、折にあつた真心のこもつた贈り物に洗

練された和歌を付けて送つて来る。それに対し、田舎育ちの男はもとより

そんな特別な日だということも知らず、有名な歌人である貫之と歌を詠ん

で自らに箔を付けたいという不純な動機から豪華な贈り物を持つて参上す

る。しかも、歌の表現はまだ未熟で「後に残つて泣く声は白波の音よりも

大きい」という表現は大変大仰で節度を欠いた表現である。ここでは、純

粋な思いやりの心を持ち、洗練された歌を詠む池に住む女性と、不純な心を持ち、中途半端に洗練のされた歌を詠む田舎育ちの成り上がり者とが対比的に描かれているのである。この(1)、(2)の記述は、貫之が歌を詠む際の心情の純粋さはもちろん、その上に歌の表現の洗練をも要求していることを推測させる。

ただし、貫之は心と表現の関係において、最も大切なのは真心のこもつた詠歌姿勢であり、洗練された表現は二次的なものと考えていたようである。そのことは、以下に示す例から窺い知ることができよう。

資料⑥

(1) かく思へば、船子、楳取うたひて、何とも思へらず。そのうたふ歌は、

春の野にてぞ音をば泣く 若薄に 手切る切る摘んだる菜を

親やまぼるらむ 姑や食ふらむ かへらや

夜べのうなぬもがな 錢乞はむ そらごとをして おぎのりわ

さをして 錢も持て来ず おのれだに來ず

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は

荒るれども、心はずこし屈きぬ。(一月九日)

(2) このあひだに、使われむとて、つきて来る童あり。それがうたふ舟歌、

なほこそ国の方は見やられるれわが父母ありと思へばかへらや

とうたふぞ、あはれなる。(二月二十一日)

これら「船子、楫取」「使われむとて、つきて来る童」のうたう民謡は、言葉の点から見れば、俗で優美なところなど少しもない。しかし、それらに対し、貫之は「これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はずこし阻ぎぬ」あるいは「とうたふぞ、あはれなる」というように不快な様子を示していない。むしろ、それらを聞いて、心が和んだり、感動をおぼえたりしている。この(1)、(2)でうたわれる歌謡は形式も短歌形式でなく、言葉も俗なものであるが、素朴な感情が率直に表現されていて、貫之はその飾らない表現の奥に人の心を感動させる力を見たのであろう。

貫之は歌は純粋な心が洗練された表現で表されるのをよしとしたが、表現が洗練されていなくとも、純真な心情の表現されているものには共感を示すのである。彼は心と言葉の双方を重視するが、その中でも大切なのは心であつて、純粋な心を失つた表現に対しては、強い拒絶感を示すのである。

四

ところで、『土佐日記』には次のような記述が見られることも注目される。

資料⑦

(1) 今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の、「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海辺にてよままし
かば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」ともよみてまじや。今、この歌を思ひ出でて、ある人のよめりける。

てる月の流るるみれば天の川出づる港は海にざりける
とや。 (二月八日)

(2) かくて、船引き上るに、渚の院といふところを見つつ行く。その院、昔を思ひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたるところなり。」故惟喬親王の御供に、故在原業平中将の、

世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし
といふ歌よめるところなりけり。今、今日ある人、ところに似たる歌よめり。

千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変わらざりけり
また、ある人のよめる、

きみ恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほにほひける
といひつつぞ、みやこの近づくを喜びつつ上る。 (二月九日)

以上の記述は『土佐日記』に見られる在原業平と惟喬親王の交流にまつわる記述である。『土佐日記』において故人が実名で現れるのは、先に引いた一月二十日条の阿倍仲麻呂とこの(1)、(2)の記述における業平および惟喬親王のみであるが、この(1)、(2)の記述は『伊勢物語』の次のような章段を想起させる。

資料⑧

むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。その木のもとにおりあて、枝を折りて、かざしにさして、かみ、なか、しも、みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし
となむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき
とて、その木のもととは立ちてかへるに日暮になりぬ。御供なる人酒をもたせて、野よりいで来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬の頭、大御酒まゐる。親王のたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたる、を題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭よみて奉りける。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは来にけり
親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえしたまはず。紀の有常、御供に仕まつれり。それが返し、

ひととせにひとたび来ます君待てば宿かす人もあらじとぞ思ふ
かへりて宮に入らせたまひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語して、あるじの親王、酔ひて、入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあら
なむ

親王にかはりたてまつりて、紀の有常、

おしなべて峰もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを

(八十二段)

先に引用した『土佐日記』の(一)、すなわち一月八日の記事は、この『伊勢物語』八十二段の後半と、(二)、すなわち二月九日の記事はその前半と対応している。一月八日は、「業平の君の、「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌」として、惟喬親王が夜も更けてそろそろ寝所に入ろうとするのを業平が引き留めようとして詠んだ歌を引き、かつその出来事を思いやつて詠じた「てる月の流るるみれば天の川出づる港は海にざりける」という歌にわざわざ「天の川」を詠み込んで、『伊勢物語』八十二段の「山の端逃げて」の歌が詠まれた夜の宴席に先立つその日の夕暮れの出来事である、天の川での贈答の場面を想起させようとしている。また、二月九日の場面は「故惟喬親王の御供に、故在原業平中将の、「世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし」といふ歌よめるところなりけり」といつて

『伊勢物語』八十二段の前半の場面を連想させる。このように、『土佐日記』の(1)と(2)の記述は、それらによって『伊勢物語』八十二段全体を想起させようと意図しているように思われる。

ところで、先に述べたように『土佐日記』において業平および惟喬というようなかつての實在した人物に言及した箇所は、一月二十日条の阿倍仲麻呂を除いて、引用した(1)、(2)の二箇所のみである。このことは、阿倍仲麻呂に関する記述が『土佐日記』の歌論的記述に大きな意味を持っていたのと同様、(1)、(2)の記述が『土佐日記』に重要な意味を持つていることを推測させる。そして、その(1)、(2)の記述が『伊勢物語』八十二段全段を想起させるとすると、『土佐日記』は『伊勢物語』八十二段全段を想起させることに重要な意味を見出していたことが想像される。では『土佐日記』が『伊勢物語』八十二段を、天の川という言葉を取り込むという工夫まで施して、その章段全体を強く想起させようとした重要な意味とは一体何であったのであろうか。

『伊勢物語』八十二段は、惟喬親王、紀有常、在原業平らの交流を描いた章段である。惟喬親王は文徳天皇の第一皇子で、母は紀名虎の娘、静子、有常は静子の兄弟にあたる。親王は父文徳の寵愛も深く、その聡明さ故に、文徳も皇太子にと願ったが、文徳と藤原良房の娘、明子の間に惟仁親王が生まれたことよって、皇太子となる夢は果たしえなかった。業平は有常の娘を妻としていたことから惟喬、有常らと知遇を得たのであろうが、しかしこれだけの関係のみから業平は惟喬、有常らに親近していたわけでは

あるまい。『伊勢物語』八十二段などに見られる業平と惟喬、有常らの親交は有常の娘婿といった関係以上の深い精神的な結びつきを感じさせる。それは、業平が「身をえうなきものに思ひなした」『伊勢物語』の昔男に比定されるように、時の権力にあえて距離を置くように身を処しており、惟喬、有常ら現実社会の権勢から疎外され、不遇をかこっている人々と同じ感情を共有していたことによるのかもしれない。しかし、それはあくまでも推測にすぎない。厳密には、業平がなぜこれらの人々と深い親交を結んだかは明らかにしがたい。ただ、確実にいえることは業平と惟喬、有常らの交流は、惟喬、有常が現実社会の権勢から疎外されているが故に、権勢に近づこうとする人々が持たざるをえない、打算的な利害関係を根底にすえたところの人間関係とは無縁な、より純粋な真心を媒介とした交流であったということである。

『伊勢物語』八十二段には「狩はねむごろにもせて、酒をのみ飲みつつ、やまと歌にかかれりけり」という記述がある。一応、狩という名分は立てているものの、特にそれに固執するでもなく、酒を飲み歌を交わすということに、狩の成果など真の目的ではなく、彼らが俗事から解放された真の心の交流を楽しんでる雰囲気を感じ取ることができる。当時、公の文芸とされ、社会的に地位は高いが、形式的で堅苦しく、心の通じにくい漢詩ではなく、社会的には二流の文芸といやしめられているが、真に心を通い合わせることのできる和歌を詠み合っているところにも、権力から遠ざかっている彼らが、世俗的な規範を捨てて、真の心の交流を図ろう

とする姿が見て取れる。

『伊勢物語』八十二段のこうしたあり方からすると、『土佐日記』が『伊勢物語』八十二段を意図的に想起させる表現をとっているのは、『土佐日記』の作者貫之が、『伊勢物語』八十二段に見られるような和歌による純粹な心の交流というものを、和歌によつて実現さるべき理想の世界と考えていたことを示すのではないだろうか⁷⁾。

歌は人の心の発露であり、それは真心を持つて発せられ、かつ洗練された表現を持ちながら人々の真の心の交流を図るべきものである。こうした思想こそが、貫之が『土佐日記』において主張したかった和歌のあるべき姿であつたのではないだろうか。

五

ところで、荒木孝子は『土佐日記』の基層—兼輔関係歌からの視座—と題する論文において⁸⁾、『土佐日記』に見られる、兼輔自身の歌あるいは貫之の兼輔に関連して詠んだ歌と類似する歌が亡児哀傷の場面やそれに近接した場面に現れることに注目して、「愛娘の死」が虚構であれ、体験的事実であれ、その表象を決定的に要請したのは、わびしい境涯をいきる『日記』執筆時の貫之の、いやまさる兼輔への慕情であり、兼輔を偲ぶよすがとなる人々への憧憬であつた」と結論づける。荒木の論文は、論証の細部においては疑問に思われるところもあるが、大筋においては首肯される。

私はかつて、『土佐日記』の主題は亡児への哀傷であつたとし、かつそれは日記執筆当時、貫之が抱いていた深い喪失感を暗示するものとした⁹⁾。

すなはち貫之は土佐に赴任している間に彼の庇護者ともいふべき醍醐天皇宇多法王、右大臣定方、堤中納言兼輔といった人々を次々に失つた。特に兼輔は彼の庇護者という以上の親密な関係で結ばれた人物であつた。土佐から京に上るといふ段になり、京が意識されてくるにつれて、それらの人々特に兼輔の不在は貫之に次第に強く意識されるようになり、さらに実際に京に着けば、それが実感として強く感じられるようになったのではない。『新撰和歌』序文の

貫之秩罷歸日。將以上献之。橋山晚松愁雲之影已結。湘浜秋竹悲風之声
忽幽。伝勅納言亦薨逝。空貯妙辞於箱中。独屑落涙于襟上。若貫之
逝去。歌亦散逸。恨使絶艶之草。復混鄙野之篇。故聊記本源以伝末代
云爾。

という表現も帰京時、あるいは帰京後の貫之のそうした悲しみを表出しているのと同じくかえあるまい。『土佐日記』執筆当時の貫之は深い喪失感にうちのめされていたのである。もし『土佐日記』が様々な偽装を用いながら彼の真に表現したいものを表現したとするなら、『土佐日記』執筆当時貫之が抱いていた深い喪失感が表現されないはずはない。そう考えて、私は『土佐日記』の主題は亡児哀傷であり、その亡児哀傷は虚構であるか

否かにかかわらず、『土佐日記』執筆当時貫之が抱いていた兼輔等の人々を失った喪失感を暗示するものと考えた。荒木の論文は私のそうした仮説のうち、亡児哀傷の部分が兼輔らへの慕情を表現するものであるとする点をより具体的に裏付けるものであると思われる。

と同時に、荒木の論文は本稿で論じてきた貫之の和歌に関する記述の一部に興味深い表現上の工夫のあることを指摘する。それは、資料⑦で引用した二月九日の場面で、貫之と思われる人物が業平を偲んでいる場面で詠まれた歌が、実は貫之が兼輔に献じた歌あるいは兼輔を偲んで詠じた歌と類似しており、それらの歌は業平と惟喬との関係に貫之と兼輔の関係をなぞらえているのではないかと指摘である。

まず、『土佐日記』の二月九日の場面で貫之と思われる人物が詠じている歌を示してみよう。

千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変わらざりけり

きみ恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほにほひける

これらの歌のうち「千代経たる」の歌について、荒木は歌仙家集本貫之

集七六七番

京極中納言亡せたまひてのち、粟田に住むところありける、そこ
に行きて、松と竹とあるを見て

松もみな竹も別れを思へばや涙のしぐれ降るこちする

という貫之の兼輔追慕の歌を挙げ、さらにこの歌の詞書が、伝一条為氏
本貫之集では

ある上達部亡せたまひてのち、ひさしくかの殿に参らで、参れるに、
ことどもさびれてあはれになりたるを、前裁の草ばかりぞかわらず
おもしろかりける。秋のことなり、風寒く吹きて、松、竹の音などお
もしろくありければ

となつている点に注目して^⑩、この『土佐日記』の「千代経たる」の歌
は業平と惟喬との関係に貫之と兼輔の関係をなぞらえているのではないかと
推理する^⑪。また、「きみ恋ひて」については、歌仙家集本貫之集から

藤原兼輔の中將、宰相になりて、よろこびにいたりたるに、はじ
めて咲いたる紅梅を折りて、「今年なん咲きはじめたる」といひひ
だしたるに

春ごとに咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞみる

(六八六)

春霞立ちぬるときの今日見れば宿の梅さへめづらしきかな (二四八)
わが宿に咲ける梅なれど年ごとに今年あきぬと思ほへぬかな(二四九)

といった歌を引き、六八六は兼輔が参議に任ぜられた延喜二十一年春の歌、二四八、二四九は延長五年から貫之が土佐守として赴任した延長八年までの間に兼輔のために詠じた「屏風の料の歌、二十首」の最初の二首であるとした上で、これらはいずれも宿の梅を主題としており、特に六八六と二四九は同発想の作品であるとする。そして、『日記』歌の「きみ恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほにはひける」は、これらの作品が成立した全盛期の兼輔への思慕やみがたく、「梅の花だけは昔にかわることなく、君なき宿に君を慕って今も匂っていることよ」と詠嘆する歌とも解せる」と指摘するのである。

確かに『土佐日記』の「千代経たる」の歌の「声の寒さは変わらざりけり」という当時の和歌にはあまり見られない表現と伝「二条為氏本貫之集の詞書の「風寒く吹きて、松、竹の音などおもしろくありければ」という表現が類似していること、および両者がかつての思い出の場所に松に昔と変わることはない風が吹いている様を詠じている点で共通することを考え合わせると、『土佐日記』の「千代経たる」の歌は伝「二条為氏本貫之集の詞書および歌を合わせた表現に通ずるものを感じさせる。また、この二つの歌に貫之が『土佐日記』執筆当時書いたと思われる『新撰和歌』序文の「橋山晚松愁雲之影已結。湘滨秋竹悲風之声忽幽。伝勅納言亦薨逝。空貯妙辞於箱中。独屑落涙于襟上。」という表現を重ね合わせると、『土佐日記』の「千代経たる」の歌と伝「二条為氏本貫之集の歌の関係はさらに密なるものを感じられ

る。さらに、『日記』の「きみ恋ひて」の歌も、以上のように「千代経たる」の歌に貫之の兼輔思慕の歌が重ね合わされている可能性が高いとすると、荒木が行った推測もかなりの蓋然性を持つてくると思われる。『土佐日記』二月九日条の業平、惟喬らへの追慕を表現した場面の背後には、業平と惟喬の関係貫之の自らと兼輔の関係にならずえ、貫之の今は亡き兼輔を慕う気持ちがこめられていると考えてよいのではないだろうか⁽¹²⁾。

『土佐日記』における和歌に関する記述は、作品全体にはばらばらに配置され、他の亡児哀傷とか社会諷刺などの記述と絡まり合って、作品全体に不統一な印象を与え、『土佐日記』がいろいろ加減に書かれたような感じを抱かせる。しかし、既に述べてきたように『土佐日記』における和歌に関する記述は、一見散漫になされているかのように見えながら、実は論理的に整合性を持つ一つの体系を形作っている。貫之は作品の統一性を損なうために、和歌に関する記述を日記の中に取り入れたのであるが、そうした狙いを持った記述においても一貫性を持った主張を展開していることが窺い知られるのである。しかも、主題をくرامそうとしてなされた記述でありながら和歌に関する記述の中で貫之が最も重視していると推定される部分、すなわち業平、惟喬らの人々によってなされた和歌を媒介とする、打算的な利害関係とは無縁の真心の交流を記す場面に、貫之は『土佐日記』の主題であるところの自らの兼輔への思慕をさりげなく織り込むのである。もちろん、渚の院を目の前にして詠まれた二首の歌と貫之の兼輔関連の歌の類似性は貫之に親しいごく一部の人々以外には理解しえないものであった

であろう。貫之はそうしたことも承知の上で、この部分にはあえて個人的な思い入れをこめて、兼輔追慕の情を人目につかぬようこつそりとすべりこませたのではないだろうか。

世間の非難から逃れるために主題をくرامさせるような記述を取り入れる。その記述は一見ばらばらのようでありながら一つの完結した主張を表現する。かつそのような工夫を施した上に主題をくرامさせるためになされた記述の中にあえて主題をひそかに書き入れる。このように見てみると『土佐日記』とは細心の注意を払い、表現効果を十分に計算し、様々な意匠を凝らして構成された、きわめて意識的な作品といえるのではないだろうか。

(注)

- (1) 『国語と国文学』二十八卷六号、昭和二十六年六月
- (2) 『土佐日記創作の功利的効用』(『国語と国文学』四十卷十号、昭和三十八年十月)、『土佐日記全注釈』(角川書店、昭和四十二年)など。
- (3) 萩谷朴『紫式部の蛇足 貫之の勇み足』(新潮社、平成十二年)
- (4) 『古今歌風の成立』第二部、第一章土佐日記試論―貫之の意図―(笠間書院、平成十一年)
- (5) 「上、中、下」という言葉は、『土佐日記』ではこの他十二月二十二日に、また「上、下、童」という言葉が十二月二十四日に認められる。なお、『伊勢物語』八十二段に「上、中、下」の語が認められるのも注目される。

- (6) 樋口寛『土佐日記』に於ける貫之の立場」(『古典文学の探求』成武堂、昭和十八年、『日本文学研究資料叢書 平安朝日記Ⅰ』有精堂、昭和四十六年、所収)

- (7) 同注(3)。萩谷は『伊勢物語』八十二段の説話の引用は、貫之の根強い氏族意識のなせるわざとしか説明のつけようはあるまい」とするが、『伊勢物語』八十二段は素直に読めば、惟喬、有常、業平の心の交流を描いたもので、そこに強い氏族意識の表出は認められない。特に、『土佐日記』においては『伊勢物語』八十二段の業平に焦点を当てており、その点でも氏族意識よりも真心のこもった交流というものに注意が向けられているようである

- (8) 『研究と資料』二十八輯、平成四年十二月

- (9) 同注(4)

- (10) 私家集大成 貫之Ⅱ(天理図書館蔵)、Ⅲ(伝行成筆自撰本切)も同様な詞書を有す。

- (11) 木村正中『土佐日記 貫之集』(新潮社、昭和六三年)は、二月九日の注に『論語』子罕編の「歳寒ウシテ然ル後ニ、松柏ノ凋ムニ後ルルヲ知ル」によって、業平の惟喬親王への忠誠心を詠み込む。さらに貫之が敬慕する亡き兼輔を偲ぶ心を託すか、『貫之集』七六七の詞書、為本に「風寒く吹きて」とあるのに注意される」と指摘する。

- (12) 業平と惟喬親王の交流を描いた一月八日の記事の直前の一月七日の記事に、童の詠んだ歌として

行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそ濡れまさりけれ
という歌があるが、この歌を歌仙家集本貫之集の
かねすけの兵衛佐かもかはのほとりにて左衛門の官人みはるのあり
すけかひゆくむまのはなむけによめる

君おしむ涙おちそふこの河のみきはまさりてなかるへら也

(貫之I・七二)

が類似している点も注目される。

本稿は、和歌文学会平成一三年十一月例会において口頭発表したものである。席上、貴重なご意見を賜った木村正中氏、青木太郎氏に感謝申し上げます。